入法界品抄

平成 28 年 6 月 5 日
製作　阿部敏雄(敏翁)

本作品は、
木村清孝著　『華厳経』筑摩書房　1991 年発行
より、「入法界品」の文章の内、現代語訳の部分を圧縮して作成したものである。
文中(　)で囲んだ語句は、原文には直接対応する語句はないが、文脈上加えて良く、かつその方が意をとりやすいと思われる場合に訳者(木村)が補ったものである。
敏翁による圧縮は、原文約 800 行中 126 行を意味が通るぎりぎりのところで抽出を試みたものである。
Ⅰ～Ⅲの分類は敏翁によるもの。

Ⅰ．善財童子の旅たち

[一]　文殊と比丘たち－－－旅たち

そこで、 文殊師利童子は「善安住」という名の高殿から文殊師利、 一切の仲間の菩薩たちと一緒に出た。（かれには） 金剛力士がいつも伴をし、護衛しでいる。
(中略)
マホーラガ王（などの王たち)、(さらには）常に迷いの世界を厭う天王たち、常に仏を敬う梵天王たちなどが、(文殊師利らと） 一緒に仏の居所へ赴き、仏の足を自分の顔につけて礼をし、さまざまの供養を行い、(それを） 済ませて、(仏の居所を） 辞去し、 南方へと旅立った。
そのときに合利弗尊者は、仏の神力を承けて、文殊師利童子が（仲間の） 菩薩たちに伴われることを自らの飾りとしてジェータヴァナの林を出て南方に旅するのを見た。(そして、 それを）見終わって、こう考えた。「私もいま、文殊師利菩薩と一緒結に行こう」と。
(中略)
そこで舎利弗尊者は、比丘たちと一緒に文殊師利のところへと向かい、そこに到着すると、文殊師利にこういった。
「これらの比丘たちは、みな最近出家したもので、あなたにお会いしたいと思っております」。
すると文殊師利童子は、すぐに菩薩の自在なすがたを現し出して、象の王 が（ゆっくりと）回るように比丘たちを見回した。 そこで比丘たちは、(かれの） 足を顔につけてお辞儀をし、後に退って一方に止まり、合掌して立ち、「われらは、この礼拝の功徳によって、舎利弗和上や釈迦牟尼世尊のように、存在するものの真実のすがたを知り、 文殊師利のように清らかな身体と身体の諸特徴と声と自在な神力を得たいものだ」と思った。

[二]　十種の大心の教え

そのときに、文殊師利は（比丘たちの思いを知って） 比丘たちにこう告げた。
「おまえたちは次のことを知るべきだ。 良家の男子、あるいは女子が十種の大きな心を完成すれば、(必ず） 仏の境地に到達する。 だから、菩薩の境地に到達するのはいうまでもない。
十種の大心とはどのようなものか。
(その話が長々と続くので省略：敏翁)
そのとき、文殊師利菩藤は、比丘たちに勧めて普賢行を修めさせ、普賢行に安住させた。

すると、その比丘たちは、大きな願いの海を生み出し、そのために身心が清らかになり、不死の神通力を獲得した。
そして、この場を離れずに一切の十方に満ちみちた真理そのものとしての仏を生 み出し、一切の仏の法を身につけた。

[三] 覚城の東にて

さて、文殊師利菩薩は、比丘たちのさとりへ向かう心を打ち立て終わると、随行者たちと一緒に段々と南方へと旅し、覚城の東に到達しで、荘厳樓サーラ（という名） の林の中の大きな塔廟がある場所に住まった。（そこは） 過去の仏たちが教化に,立ち寄られた場所であり、また、過去の仏たちが菩薩であったときに苦行を修めた場所でもある。（だから） この場所は、いつも一切の天人・ 竜・ 夜叉・ ガンダルヴァ・ 阿修羅・ 人間・ 人間以外の生物たちによって供養されてきたのである。
(中略)
さて、文殊師利は、すぐにこの場所で『普照一切法界経』を説いた。 この経は、百万億の経を随えている（経の王である)。
(中略)
一方、覚城の人たちは、文殊師利が荘厳幢サーラ（という名） の林の中の大きな塔廟の処にいると聞いて、在俗信者の男も女も少年も少女も、みな文殊師利を訪ねていった。
(中略)
また、五百人の少年たちもいる。 その名を**善財童子**、善行童子、善成童子、善威儀童子、善精進童子、善心童子、善慧童子、善覚重子、善眼童子、善臂童子、善光勝童子という。
(中略)
（文殊師利は、このとき、大衆の中にいる） 善財を（とくに） 観察し、かれがどういう因縁で善財という名なのかを知った。 この少年は、初め受胎したとき、その家の中には七つの大きな宝の蔵があり、それらの蔵から自然に金銀・ 瑠璃・ 玻球・ 真珠・ 硨磲・ 碼脳をあまねく備えつけた七宝の楼閣が現れ出ており、(以下省略　　<u>善財童子はサンスクリット語の「スダナという、裕福な少年」の訳語</u>)
　これらのことに因んで、バラモンの中のすぐれた占い師が、善財という名をつけた。
この少年は、むかしすでに過去の仏たちを供養して深く善の心を養い、常に清らかな生活を願い、よき師に近づき、行いが浄らかで、菩薩の道を修め、一切を知る（仏の）智慧を求め、さまざまの仏の教えを学んできて、心は空のように澄んで清く、菩薩の実践を身につけている。
　そこで、文殊師利菩薩は、象の王が（ゆったりと） 身を廻らすように善財を観察してから、善財に「私はいま、お前のために微妙な（仏の） 法を説こう」といい、すぐに、かれのために仏たちの正しい教えを詳しく説き示した。（すなわち） 仏たちが次に世に興す教え、浄らかな随伴者に関する教え、清らかな教えの広め方、仏たちの姿や特徴がなぜ清らかで美しいのかとぃうこと、一切の仏たちがなぜ真理そのものとしての身体を完成するのかということ、 仏たちの声がなぜ美しくすばらしいのかということを詳しく説き示し、（つまりは） 一切の仏たちの平等な正しい法を説き明かしたのである。

[四] 善財の懺悔と祈願

　さて、 文殊師利は、善財らの（集まった） すべての大衆が、この法を説くのを聞いてみな大喜びし、さとりへの心を起こしたのを知って、（さらに、かれらの） 過去のさまざまの善行によって得た力を明らかにしてから、

もとの座を離れず、適宜に覚城の人びとを教化し終わり、南方へと旅立った。
そのときに、 善財童子は文殊師利から仏のこのような多くのすぐれた功徳を聞いて、ひたすらさとりを求めて文殊師利に随った。（そして） 次の詩句を唱えた。
「（迷える私は） 三つの生存の世界を住む町とし、 高慢を垣根とし、 さまざまの（迷いの） 道を出入口とし、染愛を塹壕とし、
愚かさの闇に覆われ、三毒がいつも燃えさかっておりますので、悪魔が王となり、愚か者が寄り集まってきます。
(以下詩句 70 行ほど省略)

[五] 文殊師利の教え

すると、 文殊師利は、象の王が（ゆったりと） 身体を廻らせるように善財童子を見て、このようにいった。
「よろしい、よろしい。 君よ。 よくぞ無上のさとりへの心を起こし、善き師を求め、善き師に近づき、菩薩の実践について尋ね、菩薩の道を求めようとされた。 君よ。 これが菩薩の第一の蔵であり、（これには仏の）一切を知る智慧がそなわっている。 すなわち、善き師を求め、近づき、敬い、供養するということが、それである。
(中略)
そして文殊師利は. 善財童子のために次の詩句を唱えた。
「すばらしいぞ、功徳を具えたものよ。 よく私のもとへ来て、広大な悲の心を発し、ひたすら無上の道を求められた。
(以下詩句 18 行省略)
さらに文殊師利は、この詩句を述べてから、善財にこう告げた。
「君よ。 この南方に可楽という名の国があり、その国に和合と名づける山がある。 その山には、**功徳雲**という一人の比丘が住んでいる。 おまえは、かれのところにいって尋ねるがよい。 どのように菩薩は菩薩の実践を学び、どのように菩薩の道を修め、ないし、どのように普賢の行を身につけておられますか、と。
君よ、その比丘は、はっきりと菩薩の実践について説き示してくれよう」。
ときに善財童子は、文殊師利から教えを聞いて喜び、頭に（文殊師利の） 足をつけて礼拝し、何回もかれの周囲を巡り、仰ぎ見、悲しみ慕って、泣きながら辞去した。

Ⅱ．善財童子５３善知識を訪ねる

(以下 53 人の善知識を訪れる　その名だけを掲げる)

功徳雲比丘・海雲比丘・ 善住比丘・ 弥伽良医・ 解脱長者・ 海樓比丘・ 休捨優婆夷・昆目多羅仙人・
方便命婆羅門・ 弥多羅尼童子・ 善現比丘・ 釈天主童子・ 自在優婆夷・ 甘露頂長者・法宝周羅長者・
普眼妙香長者・ 満足王・ 大光王・ 不動優婆夷・ 随順一切衆生外道・ 青蓮華香長者・ 自在海師・
無上勝長者・獅子奮迅比丘尼・**婆須蜜多**・
安住長者・ 観世音菩薩・ 正趣菩薩・ 大天天（大天という名の神） ・ 安住道場地神・婆娑婆陀夜天・
甚深妙徳離垢光明夜天・ 喜目観察衆生夜天・ 妙徳救護衆生夜天・ 寂静音夜天・ 妙徳守護諸城夜天・
開敷樹華夜天・ 願勇光明守護衆生夜天・ 妙徳円満天・瞿夷釈迦女(**瞿波　ゴーバー**)・ 摩耶夫人・
天主光重女・ 遍友童子師・ 善知衆芸童子・ 賢勝優婆夷・ 堅固解脱長者・ 妙円長者.・ 無勝軍長者・
尸毘最勝婆羅門・ 徳生童子・ 有徳重女（以上二人、同出）・**弥勒菩薩**

[六]　功德雲比丘の教え　　（全文省略）
[七]　婆須蜜多のもとへ　　（全文省略）

[八]　婆須蜜多の教え　　（全文省略）

Ⅲ．善財童子悟りの道へ

[九]　弥勒菩薩の指示

（以下は、この一段の最後に示される弥勒菩薩（マイトレーヤ）のことばである。）

（弥勒菩薩が、さらに続けていわれた。）　「君よ。これからすぐに、文殊師利のところへ行き、どのように菩薩は菩産の実践を学び、菩薩の道を修めるのですか、と尋ねよ。 かれは必ず、おまえ のために、詳しく説き示してくれるはずである。どうしてかというと、文殊師利は、無量億ナュタの菩薩の願いとその実践を完成し、常に無量億ナュタの仏たちの母となり、また 無量億ナュタの菩薩たちの師となって、激しい努力を重ねて衆生を教化し、その名をあまねく十方の世界に識せ、常に一切の仏たちのもとに集う人びとの中で偉大な法師となり、すべての仏たちに讃えられ、深い智意の法門に安住し、一切の真実の世界を詳しく知り尽くし、無量の劫の中で諸の法門を修め、普賢菩薩の実践を究めているからである。

[十]　文殊菩薩との再会

　さて、 善財童子は、このようにして百十の町を巡り、「普門」という町の辺に到達して、（文殊師利のことを） 考えて立ち止まり、十方を見渡し、どうにかしてめぐりあい、眼のあたりやさしいお顔を拝したいものだと、一心にひたすら文殊師利を捜し求めた。
（善財重子が）このように念じたとき、文殊師利ははるか、百十ヨージャナのかなたから、普門の町にまで右手を伸ばし、善財の頭の上をなでて、こういった。
「よくやったぞ君よ。 もしも信仰という（実践の） 根本を離れるならば、憂いと悔いの中にあって心は沈み、正しい実践が身につかず、努力を失い、わずかの功德で満足し、一つの善行の根に執われてしまい、菩薩の実践の願いを起こさず、よき師に護られず、仏に思われない。
このような人たちは、こういう法の本質、こういう道理、こういう行い、こういう場所を何も知ることができない。
　あまねく知ることも、さまざまに知ることも、根源を究めることも、徐々に入っていくことも、解説することも詳しく知ることも、さとり知ることも、獲得することもできない」。
こうして文殊師利は、善財童子のために教えを説いたのち、慰めさとしてかれを大喜びさせ、無数の法門を完成させて無量の大智の光、無量の菩薩のダーラニ、無量の大願、無量の三昧、無量の超能力、無量の智意を体得させた。
（さらに文殊師利は、それらが） みな成就すると、また（善財童子を） 普賢菩薩の実践の道場の中に入らせた。
(そして)善財を自分のいるべき場所に落ち着かせると、文殊菩薩はまた姿を消してしまった。

[十一]　文殊菩薩への思い　　（全文省略）

[十二]　普賢菩薩のすがた

すると、善財には、すぐに普賢菩薩が金剛蔵道場にあって、仏の前で蓮華蔵の師子の座に坐り、大衆に囲まれているのが見えた。（その普賢菩薩は）　心は虚空のように執われるところがなく、あらゆる障害を除いて一切の仏の国を浄め、自在の法によって十方（の世界）を満たし、一切を知る智慧に住まり、さまざまの存在の世界に入って衆生を教化し、永遠に菩薩の行を実践し、一切の仏たちを敬い供養して後退することがなく、衆生の中でもっともすぐれており、一切の世間に（かれを）打ち破るものはおらず、菩薩の誰もその智意の境界を察知することはできず、思いの及ばないもろもろの妙なる功徳を具え、あまねく三世を観察して、仏たちと等しい。

(中略)

こうして、善財は、普賢菩薩の不思議な自在の神力を見て、たちまち十の破壊されることのない智慧の法門を得た。　それはどういうものかというと、すなわち（善財は）　念々のうちに一身で一切の（仏の）国に赴き、念々のうちに一切の仏のもとに行き、念々のうちに一切の仏たちを敬い供養し、念々のうちに一切の仏のもとで正しい教えを聞いて身につけ、一切の仏の教えの輪（を転らす）　智慧を得、不思議な仏の自在の智慧を得、無尽の弁説を展開できる智慧を得、正しい智慧によってすべてを観察する力を得、一切の存在の世界に救いをもたらす手立てを得、一切の衆生の欲望の本性を見通す智慧を得、普賢の実践を遂行する智慧を得たのである。

[十三]　究極の菩薩の境地の体験

そのとき、普賢菩薩が善財に告げていった。　「君よ。　おまえはいま、私の自在な神力によつで起こされた不思議な出来事を見たか」。（善財が）答えた。　「はい　その通りです。　見ました。　この不思議なことは、ただ仏を除いては誰も推し測ることのできる者はおりません」。

（普賢菩薩が説いていう。）　「君よ。　私は過去の無数の世界の微塵（の数）　に等しい劫において菩薩の行を修め、ひたすらさとりを求めてきた。（すなわち、私は）　一一の劫の間に、無数の世界の微塵（の数）　に等しい仏を見てさとりへの心を起こし、一一の劫の間に、一切の世界で無数の広大な施与の会を設けてあらゆるものを、　例えば、妻子や町や村、あるいは頭・　目・　髄・脳・手足・血・肉など身体のすべてを施して、命を惜しまず、　ひとすじに（仏の）　完全な智慧を求め、一一の劫において、無数の世界の微塵（の数）　に等しい仏を敬い供養し、その仏のもとで出家し、道を学び、正しい教えを受けて、これまで、貪り・怒り・無知の心、「われ」「わがもの」を立てる心、生死に執われるいつわりの心、他者を軽んずる心、（および）　さまざまの障害となる心を起こしたことがなく、壊れることのない仏のさとりの心を修めていまだかって失ったことがない。

(中略　　*上記下線部は「施身・捨身」に対応している：敏翁*)

そして善財童子は、普賢菩薩が行じているさまざまの大願を自ら究め、近いうちに必ず一切の仏と同じになり、その身体が一切の世界を満たして、国も等しく、身体も等しく、実践も等しく、さとりも等しく、自在の力も等しく、教えの輪を回すことも等しく、あらゆる弁舌も等しく、美しく温かな声も等しく、用いる手立ても等しく、四無畏・　十力（という仏の精神的能力）　も等しく、仏として住む所も等しく、大きな慈悲も等しく、思いはかることのできない自在の教えを説示する力も等しくなるであろう。

[十四]　結びの詩

200 行あるが全文省略

以上